

『偉業』

ナボコフ 作 貝澤哉 訳

経済学部 2年 神谷昌吾

『偉業』を手にとったきっかけは、1度挫折したナボコフの文章に再挑戦しようと思ったからだ。というのも私は以前にもナボコフの小説を読んだことがあるのだが、難解な文章を正しく理解できなかった。その結果なげやりに読んでしまい、あまり良い印象が残らなかった。だからこの機会に高い評価をうけるナボコフの小説にもう一度向き合ってみることにした。

ナボコフはロシア出身の多言語作家で、彼の小説の特徴をあげるとするならば、やはり独特の長い文章だろう。多くの情景や状態等を表す言葉が含まれる一文を理解するには高い想像力が必要であり、読書に馴染みがあれば理解に多くの時間が必要になることだろう。私の場合は一つ一つの文章を理解するのに時間がかかり、注釈がついていてもわからないことが多々あり、辞書を片手に読み進めた。年代や文化の違いも文章を難解にしている一因だろう。これだけ聞くと内容も難解なものに思えしまうかもしれないが、自伝的青春小説とよばれる『偉業』はかつて読んだ『ロリータ』よりもだいぶ読みやすい内容となっていた。

主人公のマルティンはロシア育ち少年である。スイス人の祖父の影響やイギリスを愛する母の影響で幼いころから、イギリス文学や童話にふれ、次第に空想の世界にのめりこんでいく。そんな彼の青春時代はロシア革命や世界大戦の影響から避難するようにヨーロッパの国々を巡ることになる。物語の進行の傍らでは革命運動や戦争が行われているはずなのに、それが全く感じられないような文章であった。物語はマルティンがコーリャやダーウィンといった友人と遊んだり、アーラやソーニャといった女性との恋に溺れたりと行く先々で多くの人と関係を結び、また日常のちょっとした出来事を持ち前の空想によって冒険にしたてあげるといったどこにでもありそうなエピソードが描かれている。多感なマルティンは父親の死や友人との付き合いから多くのことを感じ、考え、最後にはロシアに密入国をする計画をたてる。物語はマルティンが親しかった人に別れを告げ、いなくなってしまうところで唐突に終わってしまう。いったいマルティンがどうなったか、またなぜロシアへの密入国を決めたのか、非常に気になる終わり方だった。

しかしこの物語を読んで私が最も疑問に感じたところは偉業というタイトルが何を表しているのかということだ。なぜならマルティンは偉業と呼べるようなことはなにも成していないからだ。取り上げるにしても、精々密入国のことくらいだろう。マルティン以外に焦点を当てたとしても、やはり偉業とよばれるような出来事はなにもない。ではどうしてナボコフは『偉業』というタイトルをつけたのだろうか。

翻訳を担当した貝澤哉は書籍の中で、

『・・・純粹かつ具体的な「冒険」的細部のみの肥大こそがマルティンにとっての（そして

ナボコフにとっても)「偉業」にはほかならないわけだが、こうしたプロットの構成のために欠かすことのできないのが「旅」のテーマだろう。』【P416より引用】

と語っている。ロシア語の偉業がもともと旅行という意味があることからこのように推測したようだ。つまり旅よって生じた、結果が伴わない冒険をつなぎ合わせて長編小説に仕立て上げたことこそがマルティンにとっての偉業だと解釈したのだ。この解釈は納得いくところもあるのだが、いささか腑に落ちない。まずもともとの意味に旅行があったとしても物語の中心は旅ではなくマルティンの感性にあるように思える。また、マルティンはささいなことを空想によって立派な冒険物語にすることができるが、しかしそれだけのことで偉業と呼べるのだろうか。デジタル大辞泉によれば偉業とは「偉大な事業。立派な仕事。」のことを指す。日本語の観点からみると空想は事業でも仕事でもないわけだからこの解釈は当てはまらない。

ここで私が思ったのは、偉業とはマルティンが最後まで確固たる意志を持ち続けたすえの願望ではないかということだ。マルティンは空想の中で常々、童話の世界のような偉業を達成することを願っていた。しかし現実では偉業を達成するような機会が訪れることはなかった。一時は結婚や定職につくといった安定も考えたが、空想にとらわれたマルティンは偉業を達成する夢をあきらめきれなかった。そこでロシアに密入国することで偉業の足掛かりにしようと考えたのではなかろうか。この考えだと密入国を決心した理由にも説明がつくと思う。

ここまで私の考えを書いたが、自分ではこれが正しい考えだとは素直に思えない。なぜならナボコフの文章は難解で、正しく理解できたとは思っていないからだ。実際、わからない部分があくつもあり最後まで読んでも釈然としないもやもやが残っている。人によって本の解釈は変わるものだから、ひょっとすると日本語の訳の時点ですれが生じているかもしれない。もしロシア語が理解できたなら原文のまま読んでみたいと思った。他の人がどのように解釈したのかも気になる作品だった。

『タタール人の砂漠』

ブツァーティ 作 脇功 訳

経済学部2年神谷昌吾

この本を書店で買うきっかけとなったのは、「カフカの再来が描く幻想文学」というポップが目に入ったからだ。私は以前カフカの『変身』を読んだことがあり、その淡々と進んでいく物語が強く印象に残っている。ブツァーティのことは何も知らなかったが、そのポップにひかれ『タタール人の砂漠』を手にとった。

『タタール人の砂漠』は将校に任官したばかりの主人公ジョバンニ・ドローゴが、辺境の砦に派遣されるところから物語が始まる。ドローゴは辺境の砦に派遣されたことを快く思わず、町に帰る日を心待ちにする。しかし砦の暮らしに慣れていくにつれ、「人生は長

いのだから砦に何年か勤務するくらいなんでもないことだろう。」と徐々に考え方を変化させていく。

物語の随所に細かい情景描写があり、ドローゴの夢の中で妖精がでてくるなど神秘的な雰囲気を感じる一冊になっていた。また死が間近に迫り葛藤することを、全生涯を賭しうる戦いと表現するところや年老いていくごとに趣味が昼寝になったことを、過ぎ去った歳月の証と表現するところなどブツァーティのいいまわしは的確であるがおもしろみがあり、単調な物語のアクセントになっていた。物語の構成は後半にいくにつれて時間の経過が早くなっていく。これは加速度的にはやまる時の遁走を表現しているといわれている。

この物語のおもしろいところは起承転結とよべるような変動がほとんど見られないことだと私は思う。年を重ねるドローゴの肉体や心情の変化や、砦の様子の変化は描かれているが、ドローゴの人生を一変させるような出来事は一つ起こらない。本当に幻想文学なのか疑わしいくらいに淡々とした、かつありふれた平凡な将校の物語だった。

しかし起承転結のないことこそが読者に伝えたかったことではないかと私は思っている。つまりブツァーティはドローゴのありふれた人生を通して私たちにいくつかの教訓を示しているのだと私は感じた。砦での年を重ねることにより、友人や恋人との距離がひらいてしまったことで砦以外の居場所を失ってしまうエピソードや、栄光ある戦いを待ち続けるが、年老いて戦場に立てなくなってしまうエピソードの内にはところどころブツァーティの想いが綴られている。例えばドローゴが砦に残ることを最初に決断したとき、青春はしばみかけているという表現がなされている。実際ドローゴはこの決断により、親しかった地元の友達との関係が希薄になってしまう。ここにはたった数年であろうと失われた時を取り戻すことは容易ではないという教訓が示されているように思える。また開戦が近いと雰囲気から勝手に判断して砦に残り続ける場面では実に15年以上の歳月が経過するが、これも自身の身勝手な希望に固執して、行動を起こさないことを戒めているように思える。いつか輝かしい未来がやってくると期待し、そのかすかな期待を待ち続けるうちに時間が加速的に進み、ついには人生の終盤になってしまう。そんなありふれた、退屈な人生を、ドローゴを通してブツァーティは私たちに示しているのではなかろうか。そうだとするのならば、教訓めいた物語のうちに自分の人生をあてはめ、それぞれの答えを見つけることが大切だ。将来のために勉学に励むことや、就職のために技術を習得するなど、少なくとも行動を起こすことが必要だ。なぜなら行動を起こさずに、ながされるままでは時間だけが過ぎていくことになってしまうからだ。

教訓めいたことが多い書籍であったが、『タタール人の砂漠』が刊行された当時、ブツァーティはまだ30代であった。長く生きることによって培われるであろう教訓が多い文章ただだけに、信じられない気持ちだった。『タタール人の砂漠』にはブツァーティの体験からくるオーストリアのイメージや取材旅行でいった砂漠のイメージから構成されていると思われるものがいくつか登場する。ここから推測するに物語のなかの教訓めいたエピソードは彼自身の体験や身近な人と話を聴いて、それをモデルにしたと考えられ

る。でなければ実感のこもったような文章はかけないだろう。私もブツァーティのように人に教えを受けることができるような濃密な人生を送りたいと強く思う。

最後にブツァーティはこの物語の中で人生を本に例えている。

『こうしてゆっくりとページがめくられ、もう終わってしまったほかのページの上に重ねられる、だが、今のところは読み終わったページの嵩はまだまだ薄く、それに比べてこれから読むべきページは無限に残っている。だが、中尉よ、それでもやはりひとつのページが終わり、人生の一部が過ぎ去ったことにはちがいないのだ。』【P219から引用】

この言葉は物語を進行してきた視点とは明らかに違う角度からドロゴに問いかけるように書かれている。私にはこれが読者へ向けた言葉であるように感じられた。先は長いからと楽観的に考えるのではなく、明確な意思のもとに行動することが大切であると『ターナル人の砂漠』は訴えているのではなかろうか。そうすれば全生涯を賭した戦いにも勇気をもって立ち向かえることだろう。

『幸福論』

アラン 作 神谷幹夫 訳

経済学部2年神谷昌吾

幸福とは人それぞれによって異なるものではあるが、誰しものが求めるものであろう。ではどのような状態、あるいは状況であれば人は幸福だと感じることができるのだろうか。多くの財産があれば幸福であろうか。人間関係が良好であれば幸福であるのだろうか。私も自分の将来について考えるとき、幸福であるためにはどうすればよいか、しばしば考えることがある。そんな思考の助けになるかもしれないと思い手に取ったのが『幸福論』だ。

著者であるアランは生涯のうちに5000以上にのぼるプロポと呼ばれる哲学断章を残しているが『幸福論』はプロポのなかでもとりわけ幸福に関する93項目がまとめられたものだ。哲学断章というと難解な雰囲気があるが実際は新聞の社説のような読みやすいものになっている。93ものプロポからなる『幸福論』は散文であるため一貫性がない。そこで今回は私が特に興味を持った2つの項目を取り上げたいと思う。

1つ目は苦痛についてだ。幸福に近づくためには様々な苦痛から逃れる必要がある。ここでいう苦痛とはアランの考えに基づく苦痛のことである。つまりけんかによって機嫌が悪くなるという病気や怒りによって、ものごとを正しく考えることができなくなるという苦痛など広義の意味での苦痛である。アランは人間が元来ネガティブで精神的に安定しない生物だと考えているようだ。そこで明確な目標を持つこと、礼儀正しくふるまうこと、体操やあくびをすることが必要だと主張している。一見なんの関連性もないように見えるが、これがポジティブで安定した精神を保つのに必要なことなのだという。私なりに考えた結果、これは正しいことであるように感じた。まず明確な目標を持つことで人間は努力

をするようになる。努力をしているうちは真にネガティブになることはない。例えばなにかの資格を取ることを目標にすると仮定する。資格を取るために勉強に没頭すれば、将来に不安を感じる機会は少なくなるだろう。壁にぶつかったり、プレッシャーを感じたりすることはあるかもしれないがそれは後ろ向きな考えではなく、むしろ前向きに考えているからこそ生じる不安であるといえる。よって目標を持つことはポジティブなことだといえるだろう。また、現代ではほほえみを浮かべることが対人関係を円滑にすることが証明されているし、礼儀正しい人に対して多くの人は悪い感情を持ちづらい。体操をすることは精神的な安定をもたらすし、あくびをすることも同様の効果が得られる。これにより怒りや緊張が緩和され、柔軟な思考を維持することができる。つまり苦痛から逃れるためには努力する姿勢と良好な人間関係が必要なのではなかろうか。

2つ目は労苦についてだ。幸福ときくとなんとなく労苦とはかけ離れたもののように感じてしまうが、アランによると自分で選んだ労苦は人間の幸福に繋がるそうだ。この考えはディオゲネスの「もっともすばらしいもの、それは労苦だ」という考えの補足のようなものだが、自らが選んだ労苦をやりとげることが幸福に繋がるのだ。ここでは草刈りが例にあげられているが、雑草をすべて取り除いたときの達成感がすばらしいことは経験者なら誰もがわかることだろう。つまり人間は没頭できるなにかを求め、それを達成した時に幸福を感じるのだ。確かにやるべきことがなにもないとしたら、最初のほうはいいかもしれないが、後々どんどん怠惰になっていき次第に幸福感も薄れていってしまうだろう。しかし没頭できるようなことを誰しもが持っているとは限らない。では熱中することをもたない人はどうするのか。これに関して、アランはおもしろいことをいっている。労苦によって幸福感を得られない人間は、リスクを負うことにより熱狂し、幸福感を得ているというのだ。つまり賭け事によって幸福感を味わうということである。これは興味深い考察だと思う。まず賭け事を行うことができるということは最低限の生活を送ることができる中流階級以上の人間であるということである。いまやGDPの増加が必ずしも幸福に繋がらないことは多くの人に理解されている。GDPが低くても幸福だと感じる人は、日々を生きるために選択した労苦による達成感を得ているからかもしれない。逆にGDPが高くても幸福だと思えない人は、労苦を負うことがなくても生きていくことができってしまうばかりに幸福を感じられないのかもしれない。つまり幸福につながると信じられてきた豊かさが、逆に幸福を遠ざけてしまったのだ。その結果幸福感を味わうために賭け事をする人が増え、ついにはギャンブル依存症にまで至ってしまう人が現れてしまったのかもしれない。自分が没頭できことを見つけることができただけで、人間は幸福だといえるのだ。

『幸福論』を読んで私は自分なりに幸福とはどんなものか考えてみた。幸福には大きさがあり、自分の気の持ち方次第でいつでも幸福を実感することができる。例えば私には腕がある。当たり前のことかもしれないが、視点を変えてみれば立派な幸福だと感じられる。また幸福を感じるためには、自分が熱中することができるものが必要であり、これを見つけることができたなら将来にわたる不安も和らぐ。なぜなら熱中するということはそ

れだけ体力が必要なことであり、体力がなくなってしまうと人間はすぐに寝てしまう。毎日必死になって生きていれば将来を不安に思うことがばからしくなることだろう。簡単に言えば、よく遊び、よく働くことそれが幸福なのだろう。